



埼玉県大里郡江南町

千代遺跡群

—— 江南町千代遺跡群発掘調査概報 ——

1993

江南町教育委員会

江南町千代遺跡群発掘調査会



写真 2.3 塑像 頭部

この塑像は中門から出土した顔面部を残す小像である。木芯に粗土を付け仏像の素形を作り、この上に上質の粘土を載せて細部の目や鼻・眉等の形を整えている。おそらく仕上げには漆喰を上塗りし、さらに加彩していたものと推定される。

本像は両眼を見開き眉梁をきわだせ、頬の張りも強い威圧的な表情である。頭部は高く髻を表現しているものと推定される。復元される頭部の高さは10cm程度で小振りである。本像がどんな仏像であったのか不明だが、表情やその大きさから『天部』の一群か、『十一面観音』の頭上面の一つ「瞋怒面」または「狗牙上面」であったかもしれない。

序

江南町千代遺跡群発掘調査会

調査会長 岡 部 進

江南町は、豊かな環境と歴史に育まれた文化財が多くあり、地元の人たちの努力によって保存されてきました。これらには、榑春地区にある国指定重要文化財「平山家住宅」・塩地区の埼玉県指定史跡「塩古墳群」・千代地区の権現坂埴輪窯跡等の代表的な文化財・遺跡が荒川に面した場所から台地・丘陵上に広がっています。

各時代の生活の舞台となったこの台地上に、再び平成時代の開発として、「ゴルフ場」造成という大規模な開発がされることになりました。造成地の半分程は、緑地と共に現状で保存されたため残すことのできた遺跡もあります。それでも、記録保存するために発掘調査を実施した遺跡は、20万㎡を越えるという町として経験する初めての発掘調査となりました。

町では県文化財保護課、事業者との綿密な協議のすえ、『江南町千代遺跡群発掘調査会』を組織し、発掘調査を実施したのですが、3年間にわたる調査では多数の人々の汗と知恵が絞られました。その努力の結果、町の長く質の高い歴史を証明する保存状態の良好な遺跡や、豊富な出土遺物を得ました。現場作業を終えて間もないところではありますが、ここに発掘調査の概要を報告します。今後の資料整理により江南町の歴史がより解明されていくことを願っております。

おわりに、調査開始から現在にいたるまでご尽力いただきました、多くの関係者の方々に深く感謝とお礼を申し上げます。

江南町千代遺跡群発掘調査会

調査団長 柳 田 敏 司

平成元年九月以来三年余りにわたって実施した、千代遺跡群の発掘調査も、現場における発掘作業は無事終了し、現在は遺物の整理等の仕事を進めている。

ゴルフ場造成にともなう課題はいくつかあったが、埋蔵文化財の取り扱いもそのうちの一つであった。県・町・事業者が一体となって、困難な課題を克服して発掘調査を実施し、順調に作業を進めることができた。そして多大な成果をあげたが、特に権現坂埴輪窯跡、及び寺内の古代寺院跡（花寺）の確認ができ、重要な遺跡としてゴルフ場の一部設計変更をして、これを保存することになった。関係者として、望外の喜びである。

ここに発掘調査の概報を刊するにあたり、今日まで協力を惜しまれなかった江南町当局、教育委員会、埼玉地域開発公社、発掘作業に関係された多くの方々に、団長として心から感謝申しあげます。

序

江南町千代遺跡群発掘調査会

調査会長 岡 部 進

江南町は、豊かな環境と歴史に育まれた文化財が多くあり、地元の人たちの努力によって保存されてきました。これらには、極春地区にある国指定重要文化財「平山家住宅」・塩地区の埼玉県指定史跡「塩古墳群」・千代地区の権現坂壇輪窯跡等の代表的な文化財・遺跡が荒川に面した場所から台地・丘陵上に広がっています。

各時代の生活の舞台となったこの台地上に、再び平成時代の開発として、「ゴルフ場」造成という大規模な開発がされることになりました。造成地の半分程は、緑地と共に現状で保存されたため残すことのできた遺跡もあります。それでも、記録保存するために発掘調査を実施した遺跡は、20万㎡を越えるという町として経験する初めての発掘調査となりました。

町では県文化財保護課、事業者との綿密な協議のすえ、『江南町千代遺跡群発掘調査会』を組織し、発掘調査を実施したのですが、3年間にわたる調査では多数の人々の汗と知恵が絞られました。その努力の結果、町の長く質の高い歴史を証明する保存状態の良好な遺跡や、豊富な出土遺物を得ました。現場作業を終えて間もないところではありますが、ここに発掘調査の概要を報告します。今後の資料整理により江南町の歴史がより解明されていくことを願っております。

おわりに、調査開始から現在にいたるまでご尽力いただきました、多くの関係者の方々に深く感謝とお礼を申し上げます。

江南町千代遺跡群発掘調査会

調査団長 柳 田 敏 司

平成元年九月以来三年余りにわたって実施した、千代遺跡群の発掘調査も、現場における発掘作業は無事終了し、現在は遺物の整理等の仕事を進めている。

ゴルフ場造成にともなう課題はいくつかあったが、埋蔵文化財の取り扱いもそのうちの一つであった。県・町・事業者が一体となって、困難な課題を克服して発掘調査を実施し、順調に作業を進めることができた。そして多大な成果をあげたが、特に権現坂壇輪窯跡、及び寺内の古代寺院跡（花寺）の確認ができ、重要な遺跡としてゴルフ場の一部設計変更をして、これを保存することになった。関係者として、望外の喜びである。

ここに発掘調査の概報を刊するにあたり、今日まで協力を惜しまれなかった江南町当局、教育委員会、埼玉地域開発公社、発掘作業に関係された多くの方々に、団長として心から感謝申し上げます。

目次

—— 埼玉県江南町千代遺跡群発掘調査概報 ——

表紙	・	写真	寺内廃寺伽藍中枢部
1	・	写真	塑像仏頭部
2	序		
3	例言		
4	江南町千代遺跡群発掘調査会の組織		
5	発掘調査の関係者名簿		
6	・	挿図	遺跡の位置と周辺の遺跡
7	調査にいたる経過・その方法		
8	・	挿図	千代遺跡群全域図
9	・	写真	千代遺跡群全域航空写真
10～13	・	表	千代遺跡群発掘調査地区一覧表
14	遺跡を取りまく環境		
15～18	縄文時代の概要		
19～21	弥生時代の概要		
22～24	古墳時代の概要		
25～32	奈良・平安時代の概要		
33	中世以降の概要		
34	調査成果のまとめと課題		
背紙		写真	「花寺」墨書

例言

1. 本書は、(株)埼玉地域開発公社の実施した「江南バードレイク・カントリークラブ」ゴルフ場の造成に伴う、事前の埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は(株)埼玉地域開発公社より、江南町教育委員会の組織した「江南町千代遺跡群発掘調査会」が委託を受けて実施した。
3. 遺跡群名は造成地の大字地名から採ったが、地域内には次の遺跡が存在している。
姥ヶ沢・富士山・権現坂埴輪窯跡群・北方・西原・天神谷・山神・寺内・天神・西
4. 発掘調査は年度計画のもと、平成元年度より平成4年度まで行なった。調査中は県文化財保護課を始め多くの方々や研究機関よりご教示・指導を得た。深く感謝の意を表したい。また継続して、整理報告作業を進めている最中であり、各方面からのご意見ご教示をいただければ幸いである。
5. 本書の編集執筆は新井端と森田安彦が行ない、柳田敏司が全体の監修に当たった。

江南町千代遺跡群発掘調査会の組織

(平成元年9月～平成5年3月まで)

理 事 会

顧問	柴田 忠雄	江南町長	(平成元年 9月～平成5年 3月)
	杉田 彌平	江南町議会議長	(平成元年 9月～平成5年 3月)
会長	細井 多	江南町教育長	(平成元年 9月～平成2年 3月)
	岡部 進	江南町教育長	(平成2年 4月～)
	(専門委員)		
理事	柳田 敏司	埼玉県文化財保護審議会委員	(平成元年 9月～)
	田中 一郎	埼玉県文化財保護審議会委員	(平成元年 9月～)
	市毛 勲	日本考古学協会会員	(平成元年 9月～)

(委 員)

	富田 宗平	江南町議会議員	(平成元年 9月～平成5年 3月)
	橋本 亀明	江南町議会議員	(平成元年 9月～平成5年 3月)
	柴 芳夫	江南町議会議員	(平成元年 9月～平成5年 3月)
	長谷川七郎	江南町文化財保護審議会委員	(平成元年 9月～平成5年 3月)
	上杉 正	江南町文化財保護審議会委員	(平成元年 9月～平成5年 3月)
	吉野 廣	江南町文化財保護審議会委員	(平成元年 9月～平成5年 3月)
	笠原 金久	江南町文化財保護審議会委員	(平成元年 9月～平成5年 3月)
	関口 正典	江南町文化財保護審議会委員	(平成元年 9月～平成5年 3月)
	岡田 光恒	江南町文化財保護審議会委員	(平成元年 9月～平成3年10月)
	梶 吉郎	株式会社埼玉地域開発公社	(平成元年 9月～)
	小賀野幸作	株式会社埼玉地域開発公社	(平成元年 9月～平成5年 3月)
監事	梶 吉郎	株式会社埼玉地域開発公社	(平成元年 9月～)
	岡田 光恒	江南町文化財保護審議会委員	(平成元年 9月～平成3年10月)
	上杉 正	江南町文化財保護審議会委員	(平成3年11月～)

調 査 団

団 長	柳田 敏司	埼玉県文化財保護審議会委員
調査担当者	新井 端	江南町教育委員会 主任
調査員	森田 安彦	江南町教育委員会 主事
	関口 正幸	千代遺跡調査会 嘱託 (現 滑川町教育委員会)

事 務 局

事務局長	吉田 久雄	江南町教育委員会次長	(平成元年 9月～平成4年 3月)
	茂木 弘行	江南町教育委員会次長	(平成4年 4月～)
事務長	塚田 正久	千代遺跡調査会 嘱託	(平成2年 4月～平成2年12月)
事務員	小林美貴子	千代遺跡調査会 嘱託	(平成元年10月～平成2年12月)
	御正山英子	千代遺跡調査会 嘱託	(平成元年11月～平成2年12月)
	古谷 利美	千代遺跡調査会 嘱託	(平成3年 1月～平成4年10月)
	岡田千代子	千代遺跡調査会 嘱託	(平成3年 4月～)

(敬称略)

<作業員 一般>

新井キヨ 新井寿子 安藤ヨシ子 衣袋春江 上杉婦美子 上杉和助 梅沢かん 大谷キヨ 大沢千代
大塚宏子 大島よし 小沢和子 小沢タツ 岡部八重子 梶 一夫 笠原すい 菊地一市 京藤令子
小久保シズ 小林武雄 小林せつ子 小林サク子 小林シズ 小林広子 齊藤勝二 鈴木てる 柴田千恵子
下林フミ子 下田かず子 清水昌子 柴崎作吉 柴 きみ 鈴木ゆき 杉田すい子 杉田ちよ 相馬良道
田島サト子 高荷キミ 高荷とく 田中きの 高橋 文 高橋トリ 田中リン 高田俊一 寺山善太郎
寺山岩雄 寺山千代 寺山正子 富田ふね 富田元子 戸嶋弘明 富岡岑子 中島広子 永倉はる 野口スミ
野沢裕朗 橋本健次郎 早川富子 樋村暁治 古谷まつ 藤野富子 藤野治子 本田ヨシ 本田せい 松田良子
水野キヨ 水野千代子 水野ふじ子 森田茂次 矢島文明 矢島よし 矢島福太郎 山口藤雄 湯本とめ
吉野喜作 吉場つる 吉沢たま 吉田喜久江

<作業員 学生>

新井 誠 飯島隆男 石澤 豊 稲田健一 石山秀和 市野千尋 宇治川裕美 宇内明子 太田妙子 太田真二
大木由巳子 大場昭和 小川勝和 小川忠明 岡 恵治 岡 正人 落合寛樹 金山哲也 神田 誠 神田善弘
金子由香里 鹿山明子 小林亜紀 小林留美 小松原慎太郎 小島利史 佐藤知興 幸 修司 島野和明
品川和彦 関谷仁之 田島道哉 武田雅彦 高橋阿希 田辺奈々 塚本博之 栃原史郎 永井智教 中野俊尚
長瀬 昇 中島紀之 中島利博 永越信吾 根本 篤 野沢 勇 浜 美紀 兵 ゆり子 藤田直也 福富基裕
福田恵美 福井淳一 藤城智子 福島清志 深江俊文 松本重樹 丸山恭子 水谷芳春 三橋謙次 宮下健一朗
宮下万有美 御正山 亮 桃園正志 山本利晃 山田裕司 山岡家佐之 依田俊一郎 吉田 誠 吉野 仁
吉野弘美

<作業員 室内> 新井芳江 上杉文子 大島安子 神谷君子 志村モト子 橋本紀子 福島和子 松田清美

<指導助言・協力者>

荒井幹夫 浅野春樹 荒川 弘 安部利平 有吉重蔵 荒井健治 足立佳代 飯田充晴 石坂俊郎 石塚三夫
出縄康行 井上 肇 井上尚明 今関久夫 岩本克昌 市川 修 石川安司 今井 堯 植木 弘 梅沢太久夫
宇治川一好 上原 学 浦野裕行 江原昌俊 大友 務 小川良祐 小倉 均 大金宣亮 岡村道雄 柿沼幹夫
香取慎太郎 笠井敏光 亀井正道 亀田幸久 金子正之 金子真土 川口 潤 金井塚良一 金井塚厚志
河原純之 木村俊彦 木村昭二 木本雅康 栗原文蔵 鋤持和夫 国生 尚 小久保 徹 古池晋禄 小柴文代
権田宣行 駒宮史朗 胡 江 小松原明範 齊藤和行 澤出晃越 坂上寛一 坂山利彦 坂本和俊 塩野 博
寺社下 博 柴 益次郎 柴 征一郎 柴崎伊勢蔵 島野 賢 菅谷浩之 鈴木佳男 須田 茂 須田 勉
関 義則 関口和男 外尾常人 高井佳弘 高橋一夫 高橋史郎 高柳 茂 高村敏則 瀧瀬芳之 宅森知克
竹野谷俊夫 田中哲雄 板野和信 千装 智 塚田良道 出牛 昭 土肥 孝 寺山耕作 鳥羽政之 戸田有二
栃原嗣雄 富田和夫 富沢一明 友野 隆 利根川章彦 中島 宏 中嶋宏子 中村元一 中村倉二 中島利治
仲山清隆 中山英樹 野中 仁 長谷川 勇 畑 和 林 宏一 早川智明 平川 南 橋本澄朗 浜野美代子
板野和信 昼間孝志 昼間孝次 平田重之 福田 聖 福田征芳 堀口萬吉 堀口 修 本間岳史
松本明宣 丸山哲夫 増田逸朗 水村孝行 宮 昌之 宮島秀夫 宮本長二郎 宮崎朝雄 宮瀧交二
宮瀧由紀子 村上伸二 村松 篤 茂木克美 森岡秀人 森下昌市郎 森田 悌 柳沼賢治 山崎 武
山路直充 大和 修 湯本光雄 雪田 孝 横川好富 吉川國男 吉野 健 若松良一 渡辺 一
埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課 大里郡埋蔵文化財担当者会 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 普門寺
国分寺市遺跡調査会 足利市教育委員会 関東古瓦研究会 東アジアの古代文化を考える会 滑川・嵐山ゴルフ
コース内遺跡群発掘調査会 (株)熊谷組 (株)中央航業 (株)応用地質 (株)パリオ・サーヴェイ (敬称略)



- 1熊谷市三ヶ尻遺跡 2宮塚古墳群 3広瀬古墳群 4川本町大門遺跡 5鹿島古墳群 6平方前遺跡 7船山遺跡 8白草遺跡 9円阿弥遺跡
 10四反歩遺跡 11万願寺遺跡 12焼谷遺跡 13江南町権現坂遺跡 14南方遺跡 15宮下遺跡 16東原遺跡 17上前原遺跡 18行人塚古墳群
 19中原古墳群 20天神山古墳群 21原古墳群 22立野古墳群 23岩北田遺跡 24塩荒井古墳群 25塩古墳群 26塩西遺跡 27釜場遺跡
 28本田東台遺跡 29野原古墳群 30鹿島遺跡 31下新田遺跡 32荒神廟遺跡 33熊野遺跡 34熊谷市目白坂築跡群 35瀬山古墳群
 36嵐山町古里古墳群 37蟹沢遺跡 38芳沼遺跡 39滑川町船川遺跡 40滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群 41栗谷遺跡 42東松山市三千塚古墳群
 43嵐山町金平遺跡 44花見堂遺跡 45月輪古墳群 46屋田寺古墳群 47寺谷瓦窯跡群 48寺谷遺跡 49寺谷庵寺 50五輪沼窯跡群 51打越遺跡
 52城原北遺跡 ◎江南町千代遺跡群
 △旧石器時代 ●縄文時代 ○弥生時代 ■古墳時代 ▲奈良平安時代

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

調査にいたる経過・調査の方法

1982年以前、千代遺跡群内の9割は山林であったことに加え、農業振興地域に指定されていたため、開墾等を除いて開発を免れていた。しかし、大規模な開発計画が地元を示されると、憶測の域を出なかった開発計画が現実のものとなった。そして管理を放棄された山林の荒廃が進むと同時に、松枯れの進行にも拍車をかけ、立入調査が困難なほどであった。1988～89年に、江南町教育委員会では全町内の遺跡詳細分布調査を実施したところ、千代地内にも新たな遺跡があると推定された。とくに寺内廃寺では、遺構の保存状態が良好で建物基壇と推定される地膨状の隆起が何か所も確認され、しかもこれらが直線状に並ぶことから、伽藍配置を整えた寺院跡である可能性が出てきた。また、聞き取り調査によっても、過去の採集品の中に寺跡との性格を特徴づける瓦・塑像の遺物が見いだされ、開発に対処する遺跡の取扱いが大きな課題となっていた。

開発事業はゴルフ場造成地として計画され、1989年に埼玉県ゴルフ場設置にかかる審査において『立地承認』され開発に着手されることが決定した。この『立地承認』の付帯条件として埋蔵文化財の保護に関し、本文の中で「1. 開発に当り事前に埋蔵文化財の確認調査及び発掘調査を実施すること。2. 埼玉県選定重要遺跡である『権現坂埴輪窯跡群』と『寺内廃寺』については現状保存とすること」が条件付けられた。これを受け、町内の関連各課の調整をおこない、発掘調査体制の確立と実施方法については事業者・県文化財保護課・町当局、町教育委員会の中で協議を繰返した。その結果、1989年9月1日に事業主である株式会社埼玉地域開発公社と江南町教育長との間に、埋蔵文化財にかかる『覚書』を取り交し、埋蔵文化財の取り扱い・具体的な発掘調査について諸条件を確認した。同日、江南町教育委員会内に『江南町千代遺跡群発掘調査会』を設け長期間・大規模となる発掘調査に人的、予算的な対応をすることとした。調査会には理事会と、調査団を置き調査体制を整えた後、直ちに範囲確認調査・発掘調査を開始した。



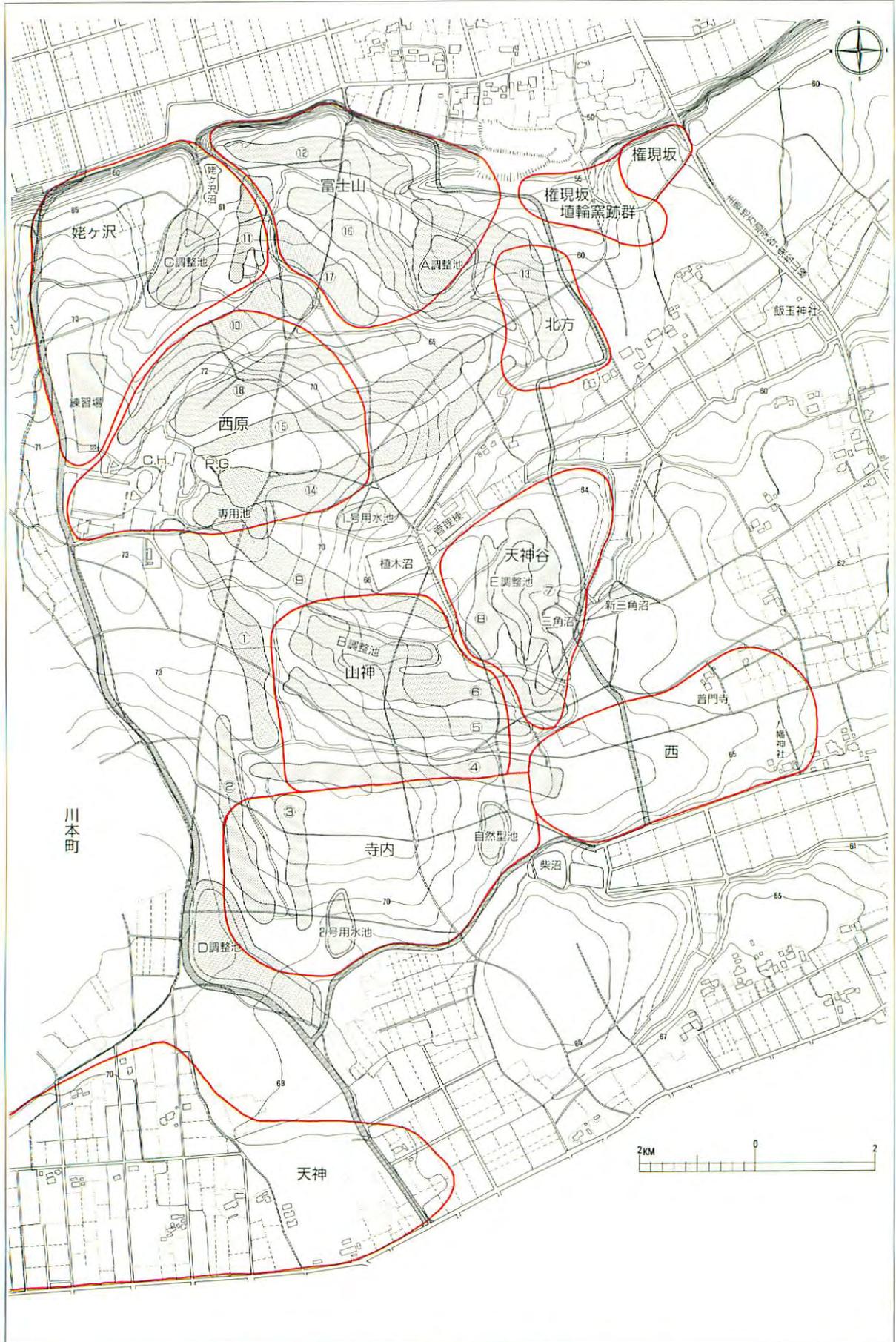
写真4 伐開の様子

発掘調査は、対象区域をゴルフコースと排水池等の造成地毎に行うもので、残存林地は現状変更をしない部分のため調査を行っていない。そのために、連続部分の少ないブツギリ状態の調査区設定となっている。

立ち木伐採と取り片付に時間を要したが、造成工事の進行順序に合わせ用地の北側より作業を進めた。

基準座標は、用地全体を覆う座標網図を設定し、これに合わせた10m間隔の試掘トレンチを延々と掘り上げ遺構の確認をおこなった。実際の調査は、造成地に合わせて全面の表土を除去した後、2～3人の発掘現場担当者を配置し2班～4班構成の調査作業員を投入して実施した。基本的にこの方法は、調査終了時まで変わっていない。

また、遺跡確認の簡便的な方法として、寺内廃寺の寺域には、発掘以前に基壇跡を中心に地下レーダーによる予備調査を行った。



第2図 千代遺跡群全域図（工事区割）約1/10,000



写真5 千代遺跡群全域航空写真

*写真の白抜きは造成地（発掘調査地）を示す。1991. 8. 16 撮影

千代遺跡群 発掘調査地区一覽表 1

1. 遺跡名	2. 調査地点	3. 調査期間	4. 調査面積 (㎡)	5. 遺跡の時代
富士山遺跡 (遺跡No.65-03)	1 2 H (第1調査地点)	89年10月18日～ 90年3月30日	18,000	縄文時代(前・中・後期) 奈良平安時代
	1 6 H・1 3 H A調整池 (第2調査地点)	90年1月24日～ 6月6日	27,900	縄文時代(中期) 古墳時代・奈良平安時代 近世
	1 7 H (第3調査地点)	90年11月26日～ 91年2月5日	10,200	縄文時代 弥生時代 奈良平安時代・近世
西原遺跡 (遺跡No.65-85)	C. H. 西 (第1調査地点)	90年5月24日～ 8月9日	8,400	縄文時代(中期) 奈良平安時代・近世
	C. H. 東 (第1調査地点)	90年7月27日～ 12月18日	16,200	縄文時代(前・中期) 近世
	1 4 H西 (第2調査地点)	90年10月24日～ 91年3月7日	11,800	縄文時代(中期) 奈良平安時代・近世
	1 0 H南 (第3調査地点)	90年12月10日～ 12月17日	1,200	縄文時代(中・後期) 近世
	1 5 H西 (第4調査地点)	90年12月12日～ 91年1月29日	7,200	縄文時代(中期) 近世
	1 8 H西 (第5調査地点)	91年1月16日～ 4月11日	9,100	旧石器・縄文時代 (中期) 奈良平安時代
	P. G. (第6調査地点)	91年4月4日～ 5月8日	3,500	縄文時代(前・中期) 奈良平安時代・近世
姥ヶ沢遺跡 (遺跡No.65-01)	外周道路 (第2調査地点)	90年6月4日～ 8月1日	1,700	縄文時代(前期) 弥生時代 古墳時代
	C調整池 (第3調査地点)	90年7月6日～ 11月27日	9,800	縄文時代(早・後期) 古墳時代
	1 1 H (第4調査地点)	90年11月26日～ 12月12日	5,600	縄文時代(早・中期) 近世
	外周道路 (第5調査地点)	91年4月5日～ 5月29日	1,100	縄文時代(前期) 古墳時代
	練習場 (第6調査地点)	91年5月8日～ 10月3日	4,500	縄文時代(中期) 近世
	姥ヶ沢沼 (第7調査地点)	92年6月10日～ 6月12日	400	不明
	外周道路 (第8調査地点)	93年5月10日～ 6月10日	700	縄文時代(前・中期) 古墳時代
北方遺跡 (遺跡No.65-84)	外周道路 (第1調査地点)	89年9月2日～ 10月8日	2,300	縄文時代(早期) 近世
	1 3 H東 (第2調査地点)	90年8月2日～ 8月14日	7,500	縄文時代(早期)
	外周道路(歩道) (第3調査地点)	91年8月2日	500	縄文時代(早期)
権現坂遺跡 (遺跡No.65-08)	工事用道路	89年8月30日～ 10月1日	800	縄文時代(中期)
	外周道路	91年2月4日～ 3月21日	2,800	縄文時代(前・中期) 古墳時代

「H」はGOLF COURSEのHOLE No. の略

6. 発見遺構	7. 発見遺物	8. 特記
住居12軒、炉穴、溝 土壙、集石土壙、埋甕	縄文土器・石器 土師器・須恵器	縄文時代前期3軒、中期2軒、 奈良平安時代7軒
住居8軒、炉穴、溝 土壙、集石土壙	縄文土器・石器 土師器・須恵器	古墳時代1軒 平安時代7軒
住居10軒、土壙 集石土壙	縄文土器・石器 弥生式土器	弥生時代集落 弥生時代8軒 平安時代2軒
住居1軒、土壙、配石	縄文土器・石器 土師器・須恵器・瓦	平安時代1軒
住居跡39軒、土壙 集石土壙、埋甕	縄文土器・石器	縄文時代中期集落 住居39軒 土偶、石棒、三角埴形土製品
住居5軒、集石土壙、 土壙、埋甕	縄文土器・石器 土師器・須恵器	縄文時代中期2軒 奈良平安時代3軒
土壙	縄文土器・石器	石錘出土
住居5軒、土壙、溝 井戸	縄文土器・石器	縄文時代中期5軒 土製垂飾出土
住居12軒、土壙	縄文土器・石器 須恵器 土師器	縄文時代石器製作跡2箇所 縄文中期10軒、奈良平安2軒
住居5軒、集石土壙 土壙	縄文土器・石器 土師器・須恵器	縄文時代中期3軒、耳飾り出土 平安時代2軒
住居13軒、土壙	縄文土器・石器 弥生土器・石器	弥生時代集落 弥生時代8軒 古墳時代5軒
住居2軒、集石土壙 埴輪窯8基、方形溝	縄文土器・石器 埴輪・石製模造品	縄文時代後期2軒 石錘出土 円筒埴輪、形象埴輪
土壙、集石土壙	縄文土器・石器	
住居4軒、土壙	縄文土器・石器 土師器	古墳時代4軒
住居1軒、土壙、溝	縄文土器・石器	縄文時代中期1軒
堤防切斷		堤防の改修
住居4軒、土壙	縄文土器・石器	古墳時代4軒
集石土壙、土壙、井戸	縄文土器・石器	
集石土壙、土壙、井戸	縄文土器・石器	
住居1軒、土壙、炉穴 集石土壙	縄文土器・石器 土師器	縄文時代早期1軒
遺構なし	縄文土器・石器	
遺構なし	縄文土器	
住居3軒、土壙、 埴輪窯10基以上	縄文土器・石器 埴輪	埴輪窯は、道路を変更して保存 縄文時代中期1軒 古墳時代2軒

千代遺跡群 発掘調査地区一覽表 2

1. 遺跡名	2. 調査地点	3. 調査期間	4. 調査面積 (m ²)	5. 遺跡の時代
天神谷遺跡 (遺跡No.65-14)	7 H北 (第1調査地点)	91年 6月26日～ 6月27日	5,700	縄文時代(中期)
	E調整池 (第2調査地点)	91年 6月26日	1,700	縄文時代(中期)
	6 H東 (第3調査地点)	91年 7月23日～ 12月6日	1,500	平安時代・近世
山神遺跡 (遺跡No.65-83)	6 H (第1調査地点)	91年 5月31日～ 8月9日	16,600	縄文時代(中期) 近世
	5 H (第2調査地点)	91年 6月17日～ 7月22日	6,400	縄文時代(中期) 近世
	9 H西 (第3調査地点)	91年 6月18日～ 8月9日	7,100	縄文時代(中期) 近世
西遺跡 (遺跡No.65-70)	4 H東 (第1調査地点)	91年 9月10日～ 11月15日	1,500	平安時代
	外周道路 (第2調査地点)	91年 9月10日～ 12月13日	1,700	縄文時代(中期) 平安時代
天神(伊勢)遺跡 (遺跡No.65-52)	外周道路	91年 5月14日～ 6月14日	1,500	平安時代
寺内遺跡 (遺跡No.65-17)	2 H (第1調査地点)	91年 7月22日～ 11月20日	14,500	平安時代・近世
	3 H (第1調査地点)	91年 11月13日～ 11月21日	8,100	平安時代・近世
	4 H (第2調査地点)	91年 9月10日～ 12月20日	15,000	縄文時代(中期) 平安時代・近世
	D調整池	91年 10月27日～ 11月14日	5,000	平安時代
	2号用水池 (第3調査地点)	91年 11月26日～ 12月20日	3,500	縄文時代(中期) 平安時代
	自然形池 (第4調査地点)	92年 10月16日～ 5月25日	3,700	縄文時代(早・中期) 奈良平安時代
	寺内古代寺院跡 範囲確認調査	92年 1月20日～ 11月30日	3,000	縄文時代(早・中期) 奈良平安時代
	外周道路	92年 2月12日～ 4月3日	1,200	縄文時代(早・中期) 平安時代
山神塚 (遺跡No.65-83)	4 H南	91年 11月6日～ 92年 2月10日	400	近世
天神谷塚群 (遺跡No.65-14)	5 H・6 Hの間	92年 2月3日～ 2月10日	500	近世
合計	10遺跡・40地点	89年 8月30日～ 92年 11月30日 93年 5月10日～ 6月10日	249,800 m ²	石器時代・縄文時代・弥生 時代・古墳時代・奈良平安 時代・中世・近世

6. 発見遺構	7. 発見遺物	8. 特記
遺構なし	縄文土器・石器	
集石土壌	縄文土器・石器	
須恵器窯1基、溝 土壌、道路跡	須恵器	平安期の窯
土壌、井戸、建物跡	縄文土器・石器 陶器	近世家屋跡
土壌、埋甕	縄文土器・石器 陶器	
土壌	縄文土器・石器 陶器	
住居7軒	土師器・須恵器	平安時代7軒
住居9軒、土壌	縄文土器・石器 土師器・須恵器	平安時代9軒 鉄製鎌出土
住居7軒、土壌、井戸	土師器・須恵器 鉄製品	平安時代7軒 石製紡錘車2点出土
寺地大溝、土壌	土師器・須恵器	寺地を囲む大規模な溝を確認 上幅6m、深60cm、東西560m
住居2軒、寺地大溝 土壌	土師器・須恵器 鉄製品	鉄製紡錘車出土
住居3軒、寺地大溝 土壌	縄文土器・石器 土師器・須恵器	縄文時代中期3軒
寺地大溝		自然遺物の採取
住居6軒、土壌、溝	土師器・須恵器	墨書土器「院」 平安時代6軒
住居54軒、土壌、溝 掘立柱建物、小鍛冶跡	縄文土器・石器 土師器・須恵器・瓦 鉄製品・羽口・鉄滓・銅滓	縄文時代中期1軒、奈良平安時 代53軒 墨書土器「東院」 「花寺」、土製紡錘車、鎌、鉄滓
住居9軒、金堂、講堂 中門、東塔、溝、寺域溝、築地	縄文土器・石器 土師器・須恵器・瓦 鉄製品・塑像・鈴・鏡 瓦塔・壁材	奈良平安時代9軒 瓦「豊」「田郷瓦大里郡」、 建物跡の規模を確定し、伽藍配 置を復元
参道、埋め立て事業面	縄文土器・石器 土師器・須恵器・瓦	墨書土器「花寺」「上院」 南門へ続く参道の検出
直径約20mの塚1基		山神祭祀にかかる近世の塚遺構
直径約8mの塚6基		円形に配置された代表的な十三 塚

住居222軒・土壌・溝・埋甕 集石土壌・炉穴・埴輪窯 須恵器窯・配石・井戸・塚 道路跡・掘立柱建物・小鍛冶跡 金堂・講堂・中門・東塔・寺地溝	遺物－コンテナ約1200箱	
--	---------------	--

遺跡をとりまく環境

江南町は、埼玉県北西部の荒川中流域右岸に位置する。町内は、①南部を東流する和田川以南の丘陵部（比企丘陵） ②荒川右岸の中位段丘である江南台地 ③部分的に下位段丘の残る荒川沖積地の3つの地形に区分することができる。江南台地は、寄居町金尾付近より江南町を経て大里村箕輪に至る東西17km、南北3kmにわたる幅狭な台地である。北側・東側は荒川及びその沖積地に面し、比高差10～15mの崖線で画され、崖線下には吉野川が流れる。南側は和田川を挟んで比企丘陵に接し、台地上は狭小な谷津や埋没谷が複雑に入り組み、その最深部および開口部には溜池が構築されている。

今回調査対象となった千代遺跡群は、江南台地の北縁に位置し、東西約1km、南北約1.8kmの範囲にわたって10箇所の遺跡が分布している。遺跡群の中央には、北東方向より1.2kmの距離で開析谷が侵入しており、最深部には植木沼・三角沼が構築されている。また、そこから埋没谷となってさらに西へ延び、地形的に遺跡群を南北にほぼ2分している。

姥ヶ沢遺跡（県遺跡 No.65-01） 江南台地の北縁に位置し、東西両側面を開析谷によって画される。その間、最も広い台地縁辺部で300mを測る。富士山遺跡・西原遺跡とは、東側の開析谷を挟んで対峙する。開析谷右岸および台地北縁部の段丘崖線斜面部には、埴輪窯が構築されている。弥生・古墳時代の集落跡。

富士山遺跡（県遺跡 No.65-03） 江南台地の北縁に位置し、東西両側面を開析谷によって画される。その間、最も広い台地縁辺部で450mを測る。西側の開析谷を挟んで姥ヶ沢遺跡、東側の解析谷を挟んで北方遺跡・権現坂埴輪窯跡群が位置する。縄文・弥生・古墳・奈良・平安時代の集落跡。

権現坂埴輪窯跡群（県遺跡 No.65-08） 江南台地の北縁に位置し、遺跡の中央に幅約20m、比高差約12mの開析谷が侵入している。埴輪窯跡は、この開析谷の東側台地崖線部に位置していることが知られていたが、今回の調査で、西側崖線部にも10数基の窯跡が確認されている。

北方遺跡（県遺跡 No.65-84） 台地縁辺部より200m程入り、植木沼へと続く開析谷に南面する。西側は解析谷を挟んで富士山遺跡が位置し、北側の権現坂遺跡とは地形的に連続する。

西原遺跡（県遺跡 No.65-85） 台地縁辺部より500m程入った、高台の平坦地に位置する。西側を姥ヶ沢埴輪窯跡群へと続く比高差1～2m程の開析谷によって、南側を植木沼より続く埋没谷によって画される。姥ヶ沢遺跡とは、東側の開析谷を挟んで対峙している。縄文時代中期の集落跡。

山神遺跡（県遺跡 No.65-83） 台地縁辺部より1km程入り、寺内遺跡へと南側に緩やかに傾斜しながら地形的に連続していく。浅い埋没谷が2本、北東方向より遺跡内に侵入している。

天神谷遺跡（県遺跡 No.65-14） 台地縁辺部より900m程入った、開析谷が植木沼と三角沼の方向へ分岐した間の舌状に張り出した地点に位置する。三角沼の南の開析谷左岸には、須恵器窯が1基確認されている。

西遺跡（県遺跡 No.65-18） 台地縁辺より1.1km程入った、柴沼へと続く開析谷に南面する地点に位置する。西側は寺内遺跡へと地形的に連続する。平安時代の集落跡。

寺内遺跡（県遺跡 No.65-07） 台地縁辺部より1.3km程入る。柴沼へ続く開析谷および埋没谷に南面し、南に向かって緩やかに傾斜する。南北方向にいくつかの埋没谷が入り込んでおり、寺院の建立にあたり大規模な整地が行われたようである。奈良平安時代の古代寺院跡、集落跡。

天神遺跡（県遺跡 No.65-52） 遺跡群の南端に位置し、台地縁辺部より1.7kmの距離を測る。北側は寺内遺跡の前面より広がる埋没谷によって画される。平安時代の集落跡。

縄文時代の概要

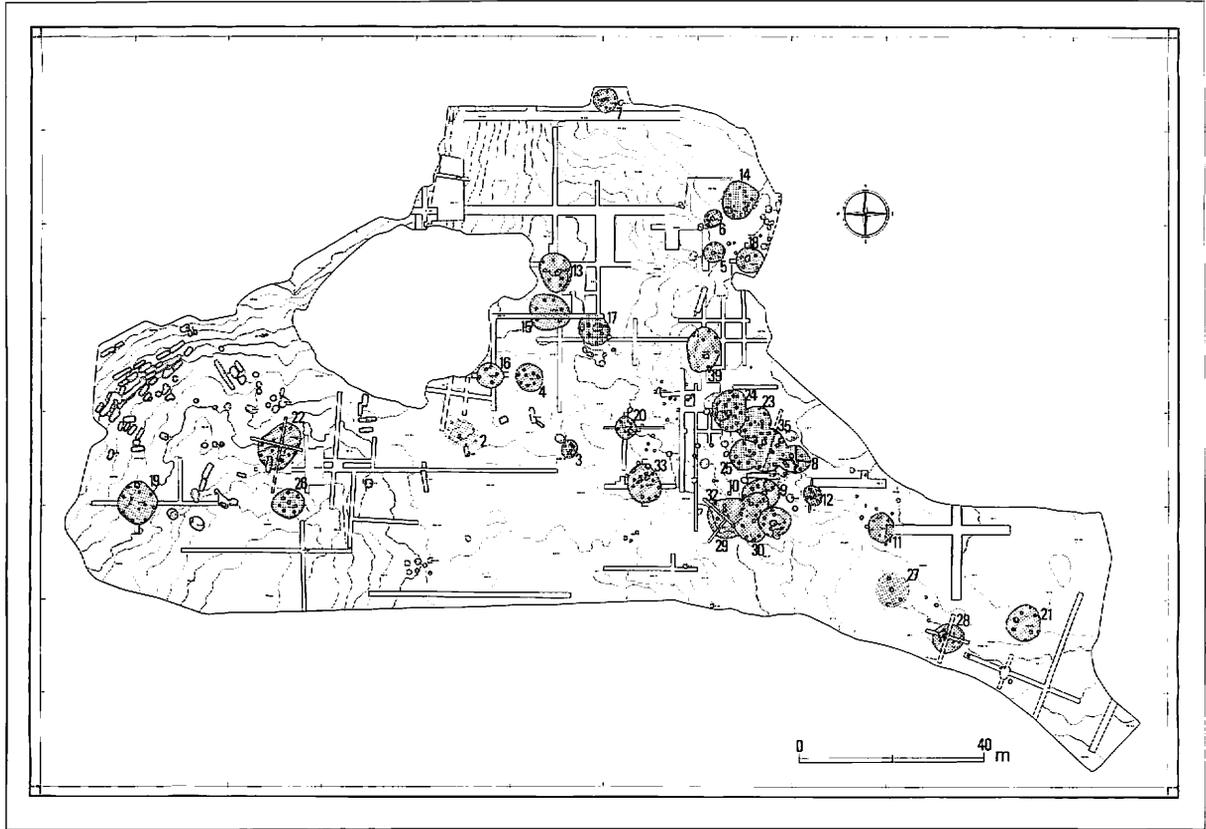
西原遺跡

中期加曾利E式期後半の集落跡で、6つの調査地点に分かれる。集落は、東西400m、南北250mの範囲で広がり、西側は姥ヶ沢埴輪窯跡群へと続く比高差2～3mの小支谷により、南側は、東側の植木沼より続く埋没谷によって画される。東側は、集落の東端より100mの空白地帯をもって埋没谷へ至る。遺物は、コンテナにして約500箱を数える。土器は、その大半が加曾利E3～4式期に属し、僅かに諸磯・称名寺・堀之内式土器が出土している。石器は、打製石斧が最も多く1,000点以上を数え、石鏃は300点以上出土している。

第1調査地点(C. H.)は、住居跡33軒、屋外埋甕4基、集石土壙1基、土壙約200基を検出している。第2号住居跡は、本遺跡唯一の敷石住居跡である。確認面が浅いため、住居跡の掘り込みは確認できなかったが、敷石と石囲い炉・埋甕が検出されている。敷石は2.7×2.4mのほぼ方形に敷かれ、中央部および張り出し部には確認されない。第6号住居跡は加曾利E式3式期後半に比定されるが、炉内および床面直上より3点の軽石製浮石が出土している。第24号住居跡は加曾利E4式期に比定され、石囲い炉と埋甕を付帯施設として持ち、炉直上より完形の石棒が出土している。緑泥片岩製で長さ33cmを測る。また、第6号住居跡の周辺には、直径1m前後のタライ形を呈する土壙が集り、第68号土壙からは三角罎形土製品が出土している。近接する第70号土壙は、長径1.4mを測る楕円形を呈し、半折した立石と、偏平礫で周囲を囲った埋設土器が検出されている。墓域としての場が想定される。小支谷に沿っては石錘が出土している。



写真6 西原遺跡(第1調査地点)全景



第3図 西原遺跡（第1調査地点）全測図

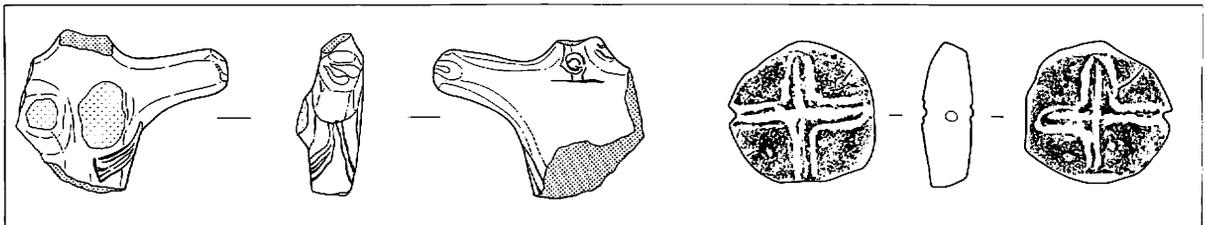
第2調査地点（14H）は、住居跡2軒、集石土壌、土壌を検出している。

第3調査地点（10H）は、屋外埋甕1基と土壌を検出している。この調査地点は、全面表土剥ぎを行ったにもかかわらず、遺構・遺物とも、姥ヶ沢埴輪窯跡群へと続く小支谷ぞいに僅かに検出されるにとどまる。地形的には連続する姥ヶ沢埴輪窯跡群との間に、空白地帯が存在するようである。第1調査地点から続く小支谷ぞいからは、石錘が出土している。また、姥ヶ沢埴輪窯跡群が発見された地点でも石錘が出土しており、この間約350mを測る。現在は浅く水量も少ないが、当時はこの支谷も深く水量も豊富であり沢に沿って魚撈活動が行われていたものと考えられる。

第4調査地点（15H）は、住居跡5軒と土壌を検出している。この地点の包含層からは、長径4.3cm、厚さ1.6cmの土製円盤状の垂飾が1点出土している。表裏とも十文字状の沈線が施文され、長軸方向に径4mm程の孔が穿たれている。

第5調査地点（18H）は、住居跡10軒と土壌を検出している。住居跡に近接して、黒曜石・チャート製の石鏃・スクレイパー及びその未製品・剥片・チップが多量に集中する地点が2箇所認められている。石器製作の場と考えられる。また、頁岩製のポイントが1点出土している。

第6調査地点（P. G.）は、住居跡3軒、屋外埋甕2基、土壌を検出している。第65号住居跡からは、土製耳飾りが1点出土している。諸磯式土器が少量出土している。



第4図 西原遺跡出土土製品（1/2）

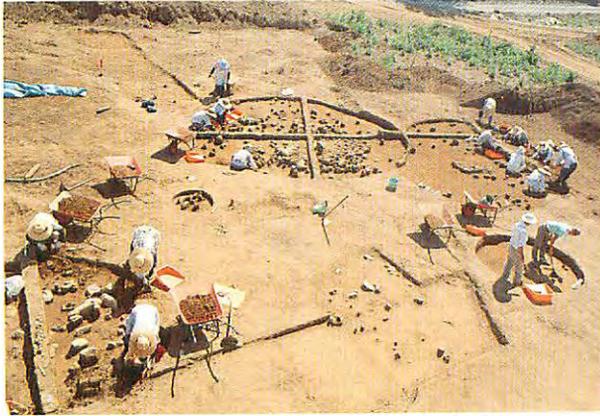


写真7 西原遺跡第1調査地点調査風景

寺内遺跡

第2調査地点(4H)および第4調査地点(自然型池)より、加曾利E式期の住居跡4軒が検出されている。第4調査地点に存在する第18号住居跡は、加曾利E3式期後半に属し、埋甕炉を付帯施設として持つ。床面直上より土製耳飾りが1点出土している。条痕文系の土器が僅かであるが出土している。また、金堂東側の埋没谷中より撚糸文系の土器が出土しており、金堂・講堂の基壇上に敷かれた石の中に多量のスタンプ形石器・磨石が使用されていた。後期に属すると考えられる石棒片1点も金堂上より出土している。

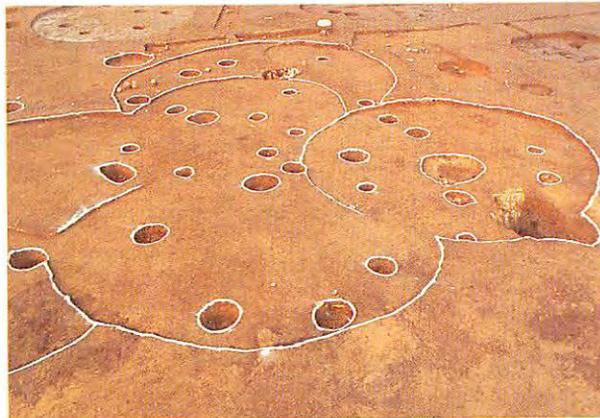


写真8 西原遺跡 第9.10.29.30.32号住居跡

山神遺跡

3つの調査地点に分かれるが、全体的に加曾利E式期の土器片が僅かに出土している。遺構は加曾利E式期の屋外埋甕が1基、第2調査地点(5H)で確認されている。第1調査地点(6H)では、黒曜石製のポイントが1点出土している。



写真9 西原遺跡 第8号住居跡

天神谷遺跡

遺構は、加曾利E式期に属すると考えられる集石土壇が1基、第2調査地点(E調整池)の埋没谷に面する南向きの緩斜面で確認されただけで、遺物は極めて少ない。

北方遺跡

早期条痕文期の住居跡1軒、炉穴2基を検出している。遺物は、野鳥式期を中心とする条痕文系土器と、後期堀之内式期の土器片が少量出土している。



写真10 西原遺跡 第2号住居跡

権現坂埴輪窯跡群

台地の縁辺に、古墳時代の住居跡にプランの大半を切られた加曾利E式期の住居跡1軒が検出されている。遺物は、野鳥式期を中心とする条痕文系土器群が少量、早期末から前期初頭に位置付けられる縄文条痕土器・撚糸圧痕文土器が僅かに出土している。1989年に、開析谷を隔てた東側の台地縁辺部において町教育委員会によって調査が行われており、縄文時代中期加曾利E1式期の住居跡4軒、集石土壇8基が検出されている。



写真11 西原遺跡 第24号住居跡出土石棒

富士山遺跡

3つの調査地点に分かれるが、遺構の検出は台地の北縁部に近い第1調査地点(12H)に限られ、他の地点では遺物の出土のみで、遺構は確認されなかった。諸磯式期の住居跡3軒、勝坂式期1軒、加曾利E式期1軒、条痕文期の炉穴3基、堀之内式期の屋外埋甕1基と土壌が検出されている。

姥ヶ沢遺跡

埴輪窯跡群の確認された第3調査地点(C調整池)の支谷の東側で堀之内式期の住居跡2軒と土壌を検出している。遺物はこの他、条痕文系の土器が僅かと石錘が出土している。第6調査地点(練習場)では、加曾利E式期の住居跡1軒が検出されている。第2調査地点(外周道路)では、諸磯式期の土器片が少量出土しており、第8調査地点(外周道路)の段丘崖線直下では、砂礫に混って磨滅の著しい加曾利E式期の土器片が少量出土している。(森田)



写真12 西原遺跡 第70号土壇



写真13 西原遺跡 第2号屋外埋甕



写真15 西原遺跡 第12号屋外埋甕



写真14 富士山遺跡 第2号屋外埋甕



写真16 姥ヶ沢遺跡 第1号土壇

弥生時代の概要

弥生時代の集落は、これまで町内では確認されていなかったが、今回の調査で、姥ヶ沢遺跡第2調査地点（外周道路）と富士山遺跡第3調査地点（17H）の2遺跡で確認することができた。

姥ヶ沢遺跡

江南台地の北縁の段丘崖線から200m程台地内部に入った第2調査地点で、8軒の住居跡と、43基の土壇が確認されている。集落は西側に南北方向に走る開析谷に面した平坦地に展開している。

住居跡の形態は、隅丸方形・方形を基本とし、炉は全て地床炉で床中央よりやや壁よりに位置する例が多い。柱穴は細く、4～6本を基本とするようである。住居跡は全て焼失住居であったが、出土した遺物は意外と完形品が見当たらず、転用品が目立った。

第1号住居跡は、4.2m×3.1mの隅丸方形を呈するプランをとる。住居南西隅の壁際に、寄り掛かるようにして完形品の縄文施文の壺が検出された。器高42cm、口径21.7cm、底径8.3cmを測る。第4号住居跡は、縄文施文の壺と櫛描文を施文した壺が床面より検出されており、注目される。両者とも胴部以下をカットしており、器台として転用されたものと考えられる。第5号住居跡は、炭化材が最も良好な状態で遺存しており、焼け落ちた屋根材の間より胴部以下をカットした縄文施文の壺が3個体並んで検出された。堅果類の炭化種子も1個検出されている。第7号住居跡は、最も遺物量の多かった住居跡で、口縁部下に微隆起線を巡らす高坏2個体と胴部以下をカットした縄文施文の壺・小型の甕・ミニチュア土器等が出土している。



写真17 姥ヶ沢遺跡全景



写真18 姥ヶ沢遺跡第1号住居跡遺物出土状態



写真19 姥ヶ沢遺跡第4号住居跡

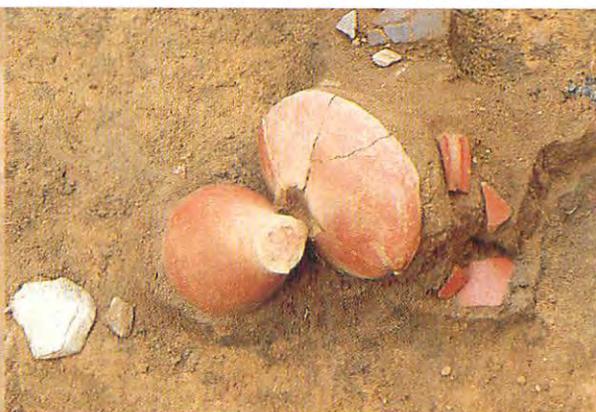
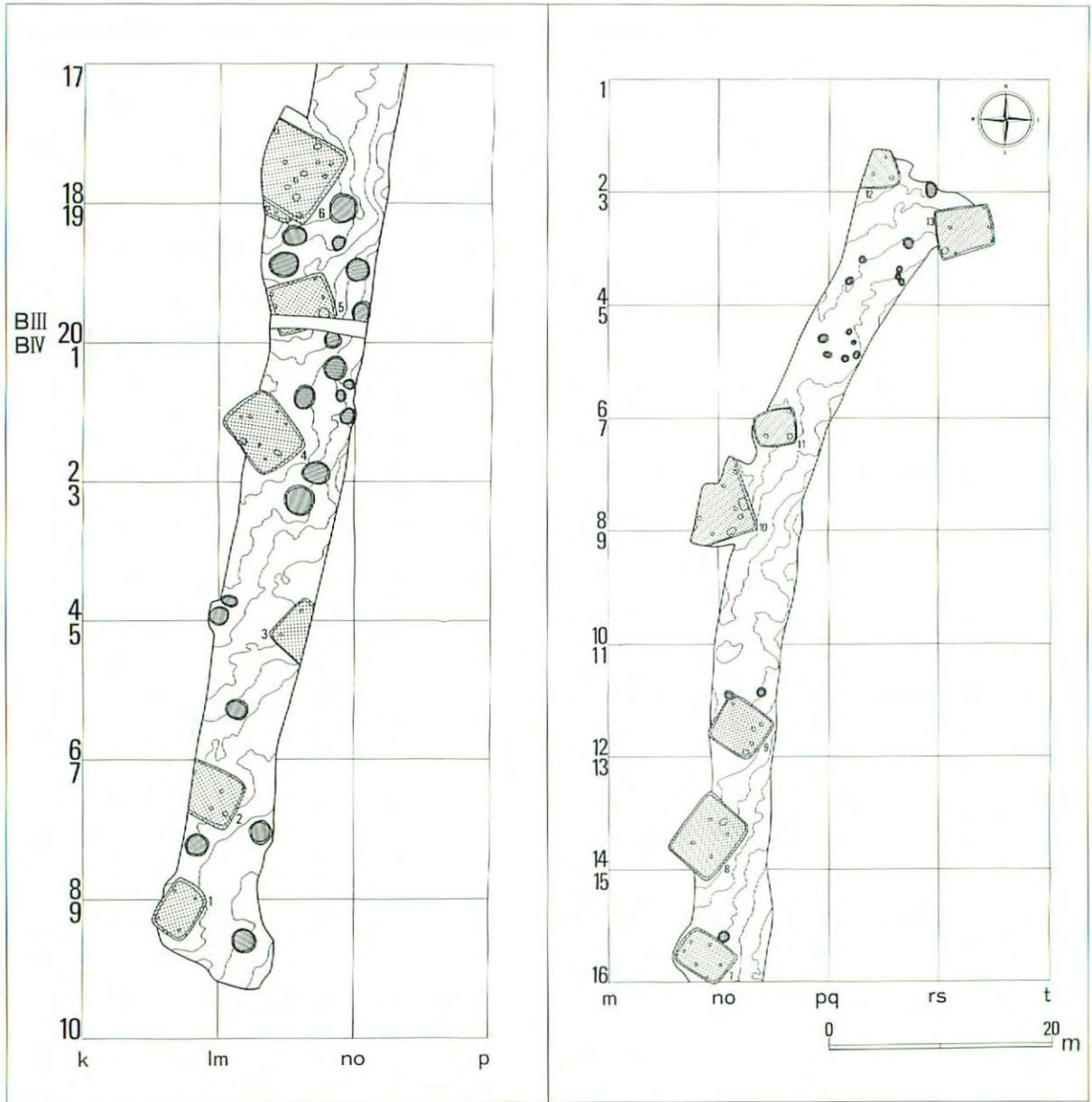


写真20 姥ヶ沢遺跡第7号住居跡遺物出土状態



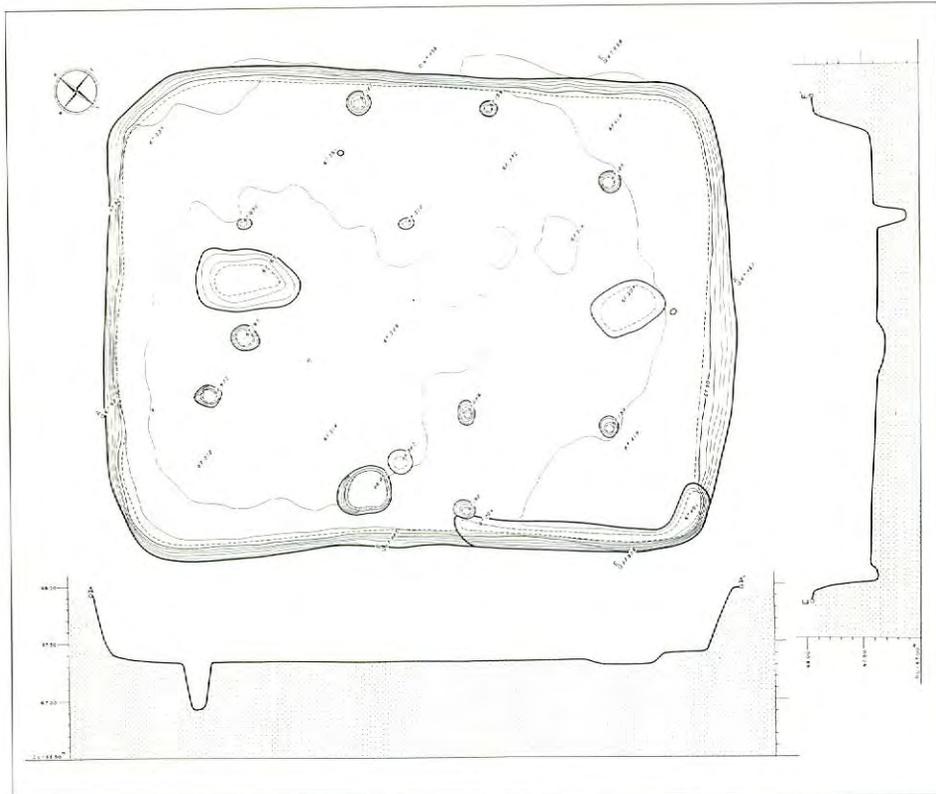
第5図 姥ヶ沢遺跡全測図



写真21 姥ヶ沢遺跡第5号住居跡遺物出土状態



写真22 富士山遺跡全景



第6図 姥ヶ沢遺跡第4号住居跡平面図 (1/60)

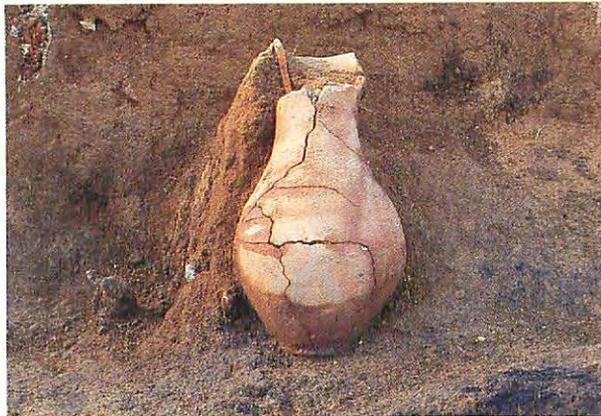


写真23 富士山遺跡 第26号住居跡遺物出土状態



写真24 富士山遺跡 第25号住居跡遺物出土状態

富士山遺跡

江南台地の北縁の段丘崖線から200m程台地内部に入った第3調査地点で、8軒の住居跡を検出している。姥ヶ沢遺跡の東方約600mの所に位置し、小さな開析谷が分岐する舌状に張り出した緩斜面に集落が展開している。

住居跡の形態は方形を呈し、炉は全て地床炉で床中央よりやや壁よりに位置する。4.1m×3.4m前後の住居と、3.5m×2.6mのやや小型の住居の2つのタイプが見られる。住居跡は全て焼失住居であった。

第25号住居跡は、3.7m×2.6mの方形を呈するやや小型の住居跡である。遺物量が最も多く、胴部以下をカットした縄文施文の壺・櫛描施文の壺3個体・二枚歯を付けたような器台が出土している。第26号住居跡は、4.8m×3.2mの方形を呈する住居跡である。炭化材が良好な状態で検出されており、胴部以下をカットした縄文施文の壺が3個体並んで検出されている。(森田)

古墳時代の概要

千代遺跡群内の古墳時代の遺跡は、富士山遺跡・権現坂遺跡・姥ヶ沢遺跡がある。遺跡の立地は江南台地の縁辺に分布しており、検出遺構は集落群と埴輪窯跡群であった。集落群は古墳時代前期の五領式から和泉式土器の時期に属していた、姥ヶ沢遺跡に集中しており弥生時代終末からが継続していた。

埴輪窯跡について

姥ヶ沢埴輪窯跡群は、1982年江南台地の段丘崖線に発見されたA地点と、A地点の東部より侵入する開析谷の中段に今回見つかったB地点から成っている。しかし、周知の遺跡である権現坂埴輪窯跡群は同一字地内で、本群より東方800mしか離れておらず、共通の生産体制下に置かれた埴輪生産跡と考えられる。姥ヶ沢の開析谷は、江南台地を流下する雨水によって侵食された狭隘な谷で、奥行1.2kmほど南西方向に侵入している。谷開口部付近は高低差が大きく、袋の口のようにすばまるため溜池に利用されている。谷の上面幅は、8～10m・下面幅は、6～4mを測る。B地点の流水面と窯体上部窯尻付近との比高差は約4mを測る。対岸は、1.5mと低い。窯跡は、この谷を200m程廻った谷右岸側を弧状に侵食した小蛇行部に現われた。窯体は8基確認され、4号窯跡が単独のほかは、上位のa群（1, 2, 3号窯）・下位のb群（5, 6, 7, 8号窯）の2群が2段に重複していた。

窯体部の埋没谷の基準土層は、①表土、②黄茶褐色土、③暗茶褐色土、④灰白色粘土、⑤砂礫層よりなる。素材とした粘土は、この灰白色粘土と考えられ斜面部に露出している。埋没谷にかかるb群の灰原・前庭付近は谷の侵食によって削り取られているが、谷埋没土中に灰原がわずかに残っていた。埋没谷は、①泥炭層1、②火山灰薄層1、③泥炭層2、④砂礫層となり、灰原層に相当する焼土塊・灰・炭化物・白黄色粘土が多量の埴輪破片と混在して②～④層上面まで堆積していた。

第1号埴輪窯跡（第7図）

第1号埴輪窯跡は、1, 2, 3号窯跡の上段の一群の最右翼に位置する。煙道部は失われるが焚口部前面には、前庭に当たる小テラスを共有しており三基の並行操業を窺わせる。灰原は、下段の窯跡の窪みを覆い埋没谷へ延びる。窯の埋没状態から窯放棄後の自然な埋没状態を示している。天井部の崩落に当たる堆積層は見当たらず、側壁の中位まで窯壁が遺存していた。窯底から出土した遺物は、細片の円筒埴輪片が大多数であったが完存の円筒埴輪もあった。窯尻付近に横臥された円筒埴輪が並べられ、焼台に使用されたことが推測された。燃焼部付近は焼成回数を窺わせる貼り床面を3枚確認している。窯の規模は、長軸3.6m・燃焼部幅1.6m・窯尻部幅0.8m・燃焼部の深さ0.7mを測り、燃焼部から焼成部へは32°～40°前後で立ち上がる。



写真25 姥ヶ沢埴輪窯跡群全景・出土埴輪（鹿）



第7図 姥ヶ沢第1号埴輪窯跡遺構実測図 (1/40)

焼成された円筒埴輪は、二条・三条凸帯の円筒埴輪が多く、透かし穴は、第2・3段目に楕円・円形を開けている。凸帯は、台形状を呈し、しっかりと張り出す。完存のものは、器高30cm～40cmで口径と底径との差が大きくなり、口縁部が外方につまみ出されるものがある。焼成は、良好で橙褐色を示すものは、固く焼き締まるが、黄褐色のものはやや軟質であった。5, 6, 7, 8号窯のグループの窯より出土した埴輪片は灰白色・青灰色に焼き締まっているものが多い。人物埴輪に大型品は見られず、腕・掌・髻・みずら等の部品が、他に鹿の頭部・飾り馬・家・太刀等の部品が出土している。注目される遺物としては、窯体内・灰原から出土した石製模造品がある。他に、土師器甕・碗・高坏等の破片が出土している。



写真26 姥ヶ沢1, 7, 8号窯全景

権現坂埴輪窯跡群は、1962年に初めて発掘調査されて以来遺跡の規模内容等が明らかでなかったが、今回の調査で従来知られていた東半部の一群に加えて西半部の一群が新たに確認された。この場所は遺跡を2分する開析谷から西側へ派生する小支谷に面した急崖で、崖下位は台地礫層が露出している。流水面までの高さは8mほどで、台地の平坦面から崖の中位にかけて、十数基の窯が分布していた。確認状態では窯形態が不整形であることから何基か重複しているものと推定された。また、窯跡から40m程離れて竪穴住居跡が2軒確認され、鬼高期の土器・埴輪片を伴うがかまどを設置していなかった。床面から粘土塊も検出され、工房的な性格を持つ住居跡と考えている。

これらの事実は、遺跡の規模が台地のかなり奥まで広がると確認されただけでなく、新たに検出された窯跡に加え工房跡・粘土採掘坑と埴輪生産にかかる遺構がはっきりした。また、姥ヶ沢・権現坂埴輪窯跡は、出土埴輪等の遺物自体が古相を示すことから、本地方に窯体構造の導入されて間もないころの埴輪生産の様相を示していると思われる。その時期は土師器年代の鬼高I式を下ることはないと考えられ、江南台地域で比較的早くから埴輪生産が行なわれていたと推定される。おそらく、拠点的な集落の周囲に埴輪生産の条件を満たす好所を選び、地点別の生産が行なわれたと考えられ、姥ヶ沢・権現坂埴輪窯跡群を包括して「千代埴輪窯跡群」として埴輪生産・供給を捉えたほうがより実態に迫れるものと思われる。 (新井)

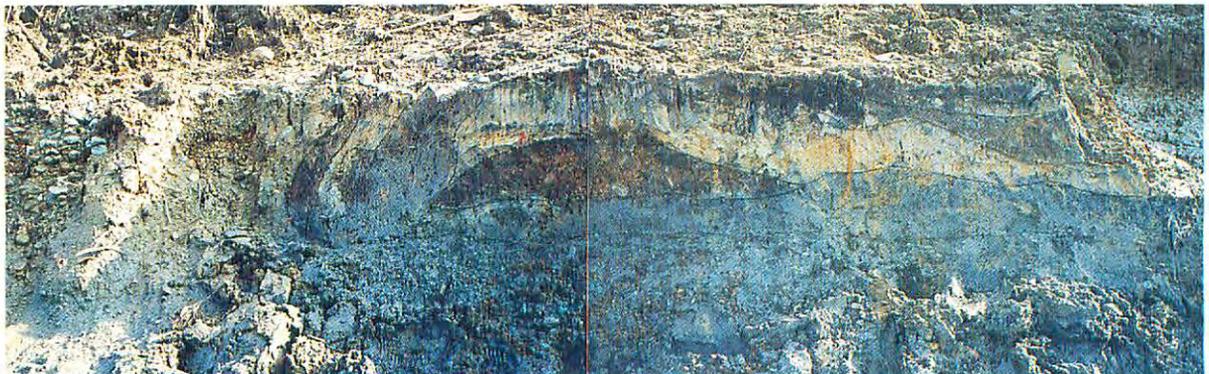


写真27 姥ヶ沢4～6号埴輪窯跡 下方埋没谷(灰原)土層断面

奈良平安時代の概要

千代遺跡群内の奈良・平安時代の遺跡は富士山、西原、天神谷、寺内、西、伊勢遺跡と多く見られ、各時代を通じてこの時代の占める割合が高い。遺跡の種類は寺跡・須恵器窯跡・住居跡群である。寺跡を除き遺跡はあまり集中が見られず台地平坦面に散漫な分布をしている。西原、富士山は広大な面積を調査したにもかかわらず数軒の住居跡が発見されたのみであった。寺跡周辺での遺跡の集中は高く遺跡の東側、南西側に集落が展開する。

寺内古代寺院跡の調査

遺跡の立地 寺内古代寺院跡は、荒川中流域の右岸台地上に位置している。遺跡は標高68m～70mの平坦な江南台地に展開し、南側は谷を挟んで古代「男衾郡」式内社の一つとされる「出雲伊波比神社」が鎮座している。また、2km圏内には塩古墳群・鹿島古墳群をはじめ古墳時代から奈良・平安時代の遺跡が数多く分布している。鹿島遺跡（岩比田地点）・塩西遺跡では、8世紀前半・9世紀前半の集落を調査し、住居跡からは円面硯・墨書土器等が出土している。また、寺跡に隣接する「百済木」地名の場所からは銅像天部像が出土しているという。遺跡は、「寺内」、「鐘撞き堂」、「堂の下」の地名を残しており、寺院跡との伝承を伝えていた。昭和6年の稲村且元氏の報告では平安期の古代寺院跡と推定されており、基壇跡や瓦の散布等が確認されていた。



写真28 寺内・金堂基壇

今回の発掘調査は、この地に計画されたゴルフ場造成に起因している。そのため、造成予定地内は江南町千代遺跡群発掘調査会が、寺院跡の中枢部は範囲確認事業として江南町教育委員会がおこなっている。

遺構の概要 発掘調査の面積は造成地部分を中心とした約5haと、伽藍中枢部に設定したトレンチ内の0.3haを対象としている。造成地部分の遺構は寺地の区画溝・住居群等で寺院の構成施設と推定されたことから、寺の規模は15町を超える可能性が予想された。中枢部分の調査は基壇建物群の推定中心線とした南北線を基準に、これと直交する推定金堂跡を通る東西線を座標とし、東・西・南・北の主トレンチを設定した。拡張部分と、A～Mのサブトレンチを部分的に加え遺構の把握に努めた。

その結果、寺跡は敷地を区画する施設と整然と配置された建物群から構成されており、ある程度遺構の特定が可能であった。以下の説明も、調査時の地点名ではなく寺院遺構の推定名称により記述する。明瞭な基壇建物は、5箇所確認され規模や配置から中門・金堂・講堂・東塔に想定している。山林が荒廃しているため、地形全体の観察を仕難いが他にも南門、西塔、回廊状遺構等の基壇建物の存在が想定される。建物跡の配置は、中門一金堂一講堂が南北方向の軸線上に並び、伽藍中軸線と重なると考えられる。金堂と東塔は並置し、西塔は明確に確認されないため、伽藍配置の形式が問題になるが現時点では双塔式の新治廃寺式か、金堂が中軸線上に乗る「法起寺式」伽藍配置の変形とも考えられる。

中門基壇は、かなり削平を受けているため礎石は遺っていないが遺存状況から、9m(30尺)×6.6m(22尺)の規模である。南面に2段の階段が設けられていた。東西方向には回廊相当施設の基壇が連続しているが遺存状態はよくない。

金堂は、基壇の大部分が遺存していたが、かなり攪乱を受けており、基壇外周はほとんど崩壊していた。覆土中・基壇上からは焼土・礫・文字瓦・塑像仏破片・鉄釘等の遺物を多量に出土しているが、基壇の西半部に集中するなど片寄りがある。推定される基壇の規模は、桁行約15m(50尺)×梁行約13.5m(45尺)である。礎石の大半は抜き取られ、南西隅を中心とした身舎部分と西側柱部分の12か所の礎石を確認できた。礎石は、強く火熱を受け赤変または崩壊していた。礎石上面は、略同レベルを測ることから本来の位置より移動していないものと推定される。また、柱根を焼付けた礎石から、身舎柱の一本は直径約30cmの円柱と考えられる。

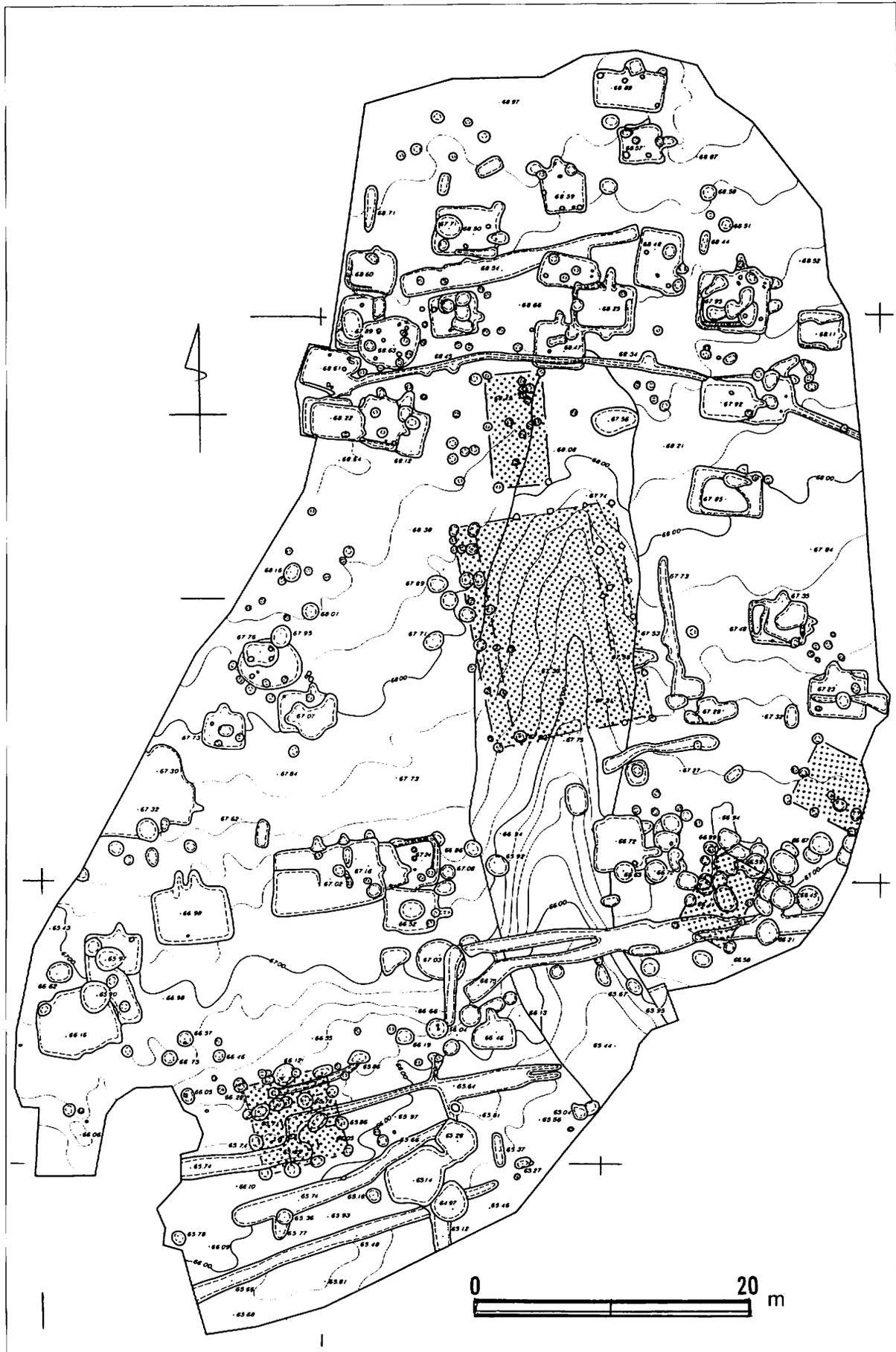


写真29 東塔基壇

金堂の建物規模は「三間四面庇付建物」で、桁行は5間(12m=40尺)で、2.4m(8尺)間隔である。梁行は4間(9.8m=34尺)で、庇2.5m(8.5尺)・身舎2.4m(8尺)と復元される。

身舎の礎石には併置して小振りの載石があり、東石と見られることから、金堂は床張の可能性もある。また、基壇化粧は多量に検出された河原石から河原石積であったと推定される。

講堂は金堂背後に位置し、最も基壇が良好に遺存していた。現地表から約60cm高まっていたが、後世畑に開墾されたことがうかがえた。基壇上に焼土・炭化物が認められたがやや少なく、部分的に攪乱を受け礎石は抜き取りに遭っている部分があった。基壇化粧は既に崩壊していたが、遺存状態から河原石積基壇と推定される。雨落等の施設は確認できていないが、基壇の東面では砂利の散布が認められた。講堂も金堂と同様に焼失しており、遺存する礎石は強い火熱のため少なからず崩壊が認め



第 8 図 寺内 東院地区調査測量図 (1/400)

られた。大型と小型の2種類の礎石が認められ、小形の礎石は金堂と同様な河原石で、大形の礎石に付随することから東石の可能性がある。身舎柱の礎石には、 1.2×1.1 mを測る大形の転石を使用していた。基壇の規模は、桁行2.1 m (7.0尺) \times 梁行1.8 m (6.0尺)と推定される。礎石の配置から復元される講堂の建物規模は「三間二面庇切妻」の構造で、桁行は3間 (13.5 m = 4.5尺)で、4.5 m (1.5尺)間隔である。梁行は2間 (6.6 m = 2.2尺)で、3.3 m (1.1尺)間隔で身舎を構成し、南面と北面に庇を付けている。

東塔は金堂の東側で伽藍中軸線に直交する東西線上に位置する。金堂中心より塔心礎位置まで2.1 mである。後世の林道開削のため基壇の西半分を削平されていたが、東半部分は良好であった。また、基壇上面もかなり削平されていたため、礎石は遺存していなかった。基壇の中央部分には心礎の抜取穴があったが、掘り方は基壇中に留まり地山面に達していなかったことから、地中式・地上式の心礎配置を採っていたものと推定される。また、基壇化粧も崩壊部分が多く明らかでない。基壇の東辺は、約1.2 m (4.0尺)である。

上記の伽藍中枢部分を取り巻く区画施設は、中門と講堂を結ぶと考えられ、現況では講堂西側より派生する基壇状の隆起が約4.5 m部分で南へ折れることから、約9.0 m方形の区画と推定される。しかし、基壇の遺存状態が良くないため、土堀または築地状の区画であったかもしれない。

伽藍中枢部を含め宗教活動を主に行う区画は「寺域」であり、寺院の規模をいうときに使うことが多いが、厳密に寺院全体の敷地を指す場合は「寺地」を当てる。寺域・寺地の区分は寺院施設の機能区分として宗教活動施設・維持管理施設・付属施設等を持つ場合が多い。

本遺跡の場合は寺域の区画施設として、溝と築地堀が認められた。中枢伽藍を囲むAとBの区画施設が確認され、調査の結果からAからBへの変遷が推定される。Aは溝で金堂を中心に東西南北各辺にほぼ方形に巡らされ、一辺の長さは約13.0 mである。上面幅は0.8 mを測り、整った箱薬研形をしていた。拡張されたBは溝と築地堀による区画で、ほぼ長方形に巡らされる。溝の上面幅は約1.2 mを測る。南辺はAの溝に一致するが、北一東一西辺は各々寺地方向に拡張される。北辺は築地堀を築き、東西辺は溝を構築する。Bの規模は、東西22.0 m・南北16.5 mである。

寺地の区画施設は大溝であり、上面幅6 m・下面幅4 mの箱薬研形を呈している。造成地の6地点で部分的に検出された。大溝の平面配置は南辺の開いた「コの字状」を呈しており、各辺の延長は西辺約29.4 m以上・北辺約56.0 m・東辺約20.6 m以上である。北辺中央部分は溝が寺外へ大きく張り出す伽藍の中軸線上に位置し、建物跡も検出されることから北門等の施設位置と推定される。この部分の大溝がもっとも深く1.2 mであるが、ほぼ分水界に当たるため地形に合わせ東南・西南方向に進むにつれ浅くなり、西辺南端では40 cmの深さとなる。



写真30 「寺地」北辺大溝(北門付近)



写真31 寺内 全域垂直写真 1991, 8 撮影 (左方が北になる)

「寺地」を囲む大溝が調査区に連続して検出されている。中央部分のさら地部分が基壇建て物の跡である。



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13

写真32 寺内 墨書のある須恵器・土師器

1. 『花寺』(赤外線TV撮影一助 埼玉県埋蔵文化財調査事業団協力) 2. 『花寺』 3. 『石井寺』
 4. 『花』 5. 『観』 6. 『寺』 7・10. 『上院』 8・11. 『東院』 9. 『千油』 12. 『後』
 13. 『多』

寺域のA・Bの区画と寺地の大溝に区画された区間は、平均100m程の距離を有す広大な空間であった。造成地部分の調査では、住居群・土壌群等が検出された。西側では密集した土壌群とまばらに竪穴住居跡が確認され、住居跡からは「□院」の墨書土器等が出土した。また、東側では主に伽藍の北東から東にかけて40軒に及ぶ住居跡・掘立柱建物跡が検出された。住居跡からは、日常の仕器のほかに鍛冶工具・鍛冶炉等の出土品が多く認められた。寺の維持施設の一部である雑舎群に相当するものと推定され、多数出土した墨書土器から「東院」と呼ばれていたと考えられる。住居跡は幾度も建替がなされ、長期間の定住が推定される。道路遺構は、南門の想定地の前面に検出されたことから寺に至る「参道」跡と推定している。この地区は埋没谷に移行する低湿な部分であり、道路の基盤はローム系の土砂により埋め立てていた。基盤は約15mの幅を持ち、中央の幅9mを道路部分とし両脇に側溝を配していた。硬く締まった路盤上には、黄褐色土混じりの黒色土を舗装状に被覆していた。基盤の外側は時には滞水していた低湿地であり、とくに西側は火山灰層が明瞭に堆積していた。寺地外になるが、寺地の東辺大溝に接して瓦塔の採集された西遺跡の集落が展開している。

出土遺物（第9図）

出土遺物には、瓦類・土器類・陶器類・金属製品・生産具・宗教遺物・建築用材等がある。出土状態・遺物の共伴関係においても注目されるものが多々認められた。詳細は本報告とし、遺物の概要を以下に取り上げる。

金堂は火災焼失後、礎石の抜き取りなど攪乱を受けているが遺物は基壇上から基壇周囲に分布していた。濃密分布地は基壇南西部分を中心とする範囲で礎石の遺存部分とほぼ一致している。東の側柱部分では遺物の分布は少なかった。基壇周囲では東・北・西部分に多く見受けられた。遺物の大半は瓦であった。

講堂は割合遺物が少なかったが後世の開墾時に片付けた石塚が地境部分にあり、かなり開墾が進んでいたらしい。参道および参道脇の埋没谷には廃棄された土器・瓦・石材・鉄滓等の生産工具を含む多量の遺物が出土している。東院住居群からも遺物が多量に出土しており、須恵器・土師器等の仕器の類、生産工具・製鉄関連遺物等が出土している。

軒丸瓦は2種認められ、A「素弁八葉蓮華文」とB「単弁四葉蓮華文」がある。軒平瓦は「偏行唐草文」が3種認められる。丸瓦は行基式といわれる無段のものが主体であり、確認されたものは粘土横紐造が多く、凹面布目凸面縄叩きの後、良くナデられている。凹面の布目は全面から半分程まで丁寧にナデ消したものがかなり見られ、周縁の面取りを行うなど丁寧な造りといえる。平瓦は製作技法から2大別でき、粘土横紐造と粘土板一枚造が認められる。叩きには、格子叩きと縄叩きが認められる。平瓦には「大」・「山」・「大里郡□」・「□田郷瓦大里□」・「□田郷瓦」等の文字や、「豊」（豊島郡刻印）の書かれたものがある。

寺跡の性格を裏付ける宗教遺物には『塑像』があり、出土場所は金堂が最も多いが、いずれも小破片となっていたため部位不明の破片が多い。かろうじて「螺髮」「邪鬼の足」と推定できるものがある。また、中門から小塑像の頭部が出土している。（巻首図版参照）

墨書土器は約100点程出土しているが、これらは須恵器・土師器に書かれたものが主体である（写真32参照）。これらに記された字義については慎重に検討されなければならないが、判読できる墨書には「花寺」,「石井寺」,「東院」,「上院」のように寺名や施設名を示す一群や、「玄」,「観」,「多」のように一文字からなり、吉祥句とも略字とも推定されるものもある。

出土数の多い鉄製の釘は建築用材として使用されたものと推測され、それぞれの建物跡から出土するが、法量の差から数種類に区分される。大型のものは図示した、頭貫の釘と推定される24cmの鉋頭を有するものが金堂より出土している。

(新井)

調査成果のまとめと課題

千代遺跡群の発掘調査は、千代地区に刻み付けられた幾千年間の歴史を古いアルバムを見るように各時代に渡って振り返ってみることに似ている。本報告までには多くの遺構や出土遺物を検討しなければならないが、各時代の概要と注目される成果は以下のようなものである。

縄文時代

西原遺跡では、敷石住居跡1軒を含む52軒の住居跡が検出されている。各住居跡の細かな帰属時期は把握できていないが、包含層出土遺物も含めておおよそ加曽利E3式後半よりE4式の期間に全て収まるようである。西原遺跡では遺跡想定範囲である90,000㎡の約半分を調査しており、単純に考えるなら該期の住居跡は100軒を越えるものと推測される。該期における集落は、特に勝坂式後半より継続するような大規模な集落においては、加曽利E3式後半で急速にその集落規模が縮小するのが一般的傾向である。これに対して、本遺跡のように短期間に展開する大規模な集落のあり方は、該期の住居形態が比較的掘り込みが浅く検出されにくいということを考えても、あまり例を見ない。このような短期間・大規模な集落のあり方は、いくつもの小さな谷津によって開析された江南台地北縁の特徴なのか、荒川中流域における集落の一般的な形態なのか、当地域では調査例が少ないだけに今後検討を要する問題である。

弥生時代

姥ヶ沢・富士山両遺跡とも弥生時代後期の吉ヶ谷期に属するもので、遺構の分布密度や地形の広がりから、比較的規模の大きい集落と推定される。検出された住居跡は、全て焼失しており、失火によるものか意図的なものか検討を要する。また、全て焼失住居でありながらほとんど遺物の検出されなかった住居跡と、床面に多量に遺物の検出された住居があり、かつ、器の完形品が意外と少なく転用品の多いことは当時の土器の扱われ方として注意される。住居跡の覆土中にほとんど遺物の混入が見られないことから、両集落とも存続期間はそう長いものではなかったことが推測される。両遺跡出土の土器を大まかに比較してみると、姥ヶ沢遺跡においては、縄文施文の壺・甕・口縁下に微隆起線を巡らす高坏の出土が目立ち、富士山遺跡においては、櫛描文の施文された壺・甕の出土が目立っている。この時期比企丘陵を中心とする地域では、縄文施文を特徴とする吉ヶ谷式土器と櫛描文を中心とする岩鼻式土器の両様式が並立して存在することが論じられている。しかし、江南台地では、立地を同じくして、遺跡間の距離600mという近さで、それぞれ主体とする土器の様相が異なっている。該期の土器群の様相を考えるうえで良好な資料を提供するものと考えられる。

古墳時代

古墳時代の遺跡は、埴輪生産跡にかかわる遺構が検出されたことが第一の成果といえる。埴輪窯跡は姥ヶ沢・権現坂の2遺跡に確認されたことになり、両遺跡の距離を縮める結果となった。姥ヶ沢・権現坂の両埴輪窯跡群は、江南台地北縁に築かれた埴輪生産跡として一体であり、不可分のものであろう。

窯体構造は、窯然焼部から焼成部へかけて窯底が急角度で立ち上がるものが主体で、長軸5～6mを測る半地下式の築窯であった。また、窯体の切り合いが認められ下位より上位に順次築窯される。これらの事実は、権現坂でも同様であり、以前の発掘調査では確認されていなかったことである。加えて、工房と推定される竪穴住居跡や粘土採掘堀と推定される縦穴の検出など、埴輪生産にかかる諸遺構が明らかになった。

奈良・平安時代

今回の発掘調査から古代男衾郡下の寺院の実態を解明できる数多くの成果を得たが、これは、古代地方寺院の

実態に迫る良好な資料と考えられる。特に以下の点を挙げておきたい。

- ① 寺は、伽藍配置及び院舎等の施設を整えた本格的な寺院と推定され、基壇建物等寺院の実態が復元可能であること。
- ② 寺の活動時期は、9世紀後半頃が最盛期と推定されるが、創建はさらに遡ると予想されること。また、終末は、10世紀末と考えられること。
- ③ 寺からの出土遺物には、武藏国分寺使用の瓦が見られ、寺院との性格を裏付ける当時の宗教関係遺物が多数あり、「花寺」「石井寺」「東院」「上院」等の墨書土器から寺名や施設名がわかること。
- ④ 寺は、古代男衾郡にあり、当時の郡大領「壬生吉志氏」の活動時期と重なることから、その影響を想定されること。

上述のように、千代遺跡群の発掘調査では各時代の遺構・遺物を初めとする多量の情報を得た。この中に今後の地域研究に占める重要な資料と考えられるものが多く認められる。このような成果をもたらした遺跡は、工事による造成部分ではおおた消滅している。しかし、④、残存林地として保存された部分（第2図 造成地以外の場所）と、⑤、当初より保存地域とされた部分（県選定重要遺跡 寺内廃寺・権現坂埴輪窯跡群）と、⑥、工事計画を変更して保存の措置が取られた部分（権現坂埴輪窯跡群の一部）は、現状のまま遺跡の保存が約束され、行政と事業者との間で締結した『協定』・『覚書』に基づき恒久的な保存活用の方針が模索されることになろう。発掘調査成果は記録の形で保存された割合が多いが、部分的にでも遺跡が残される道が開けてきたことに対して、素直に喜びたい。また、今後の保存活用の基礎資料とできるように調査成果の内容を本報告までに深めていきたい。

(調査団一同)

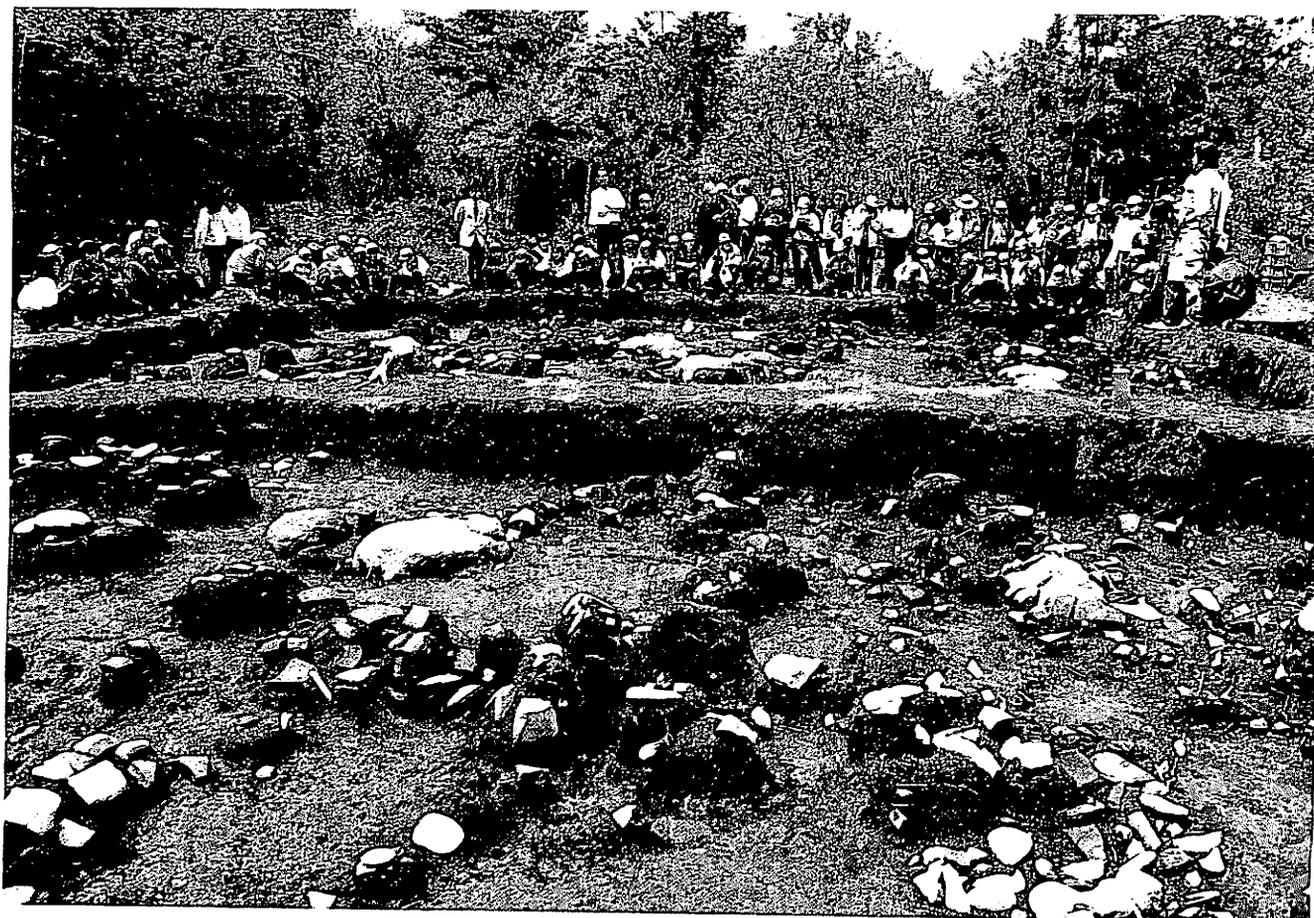


写真38 寺内・発掘現場を見学する小学生（松本明宣氏撮影）



写真39 寺内発掘現場（東院）を視察する埼玉県知事 92. 4. 27

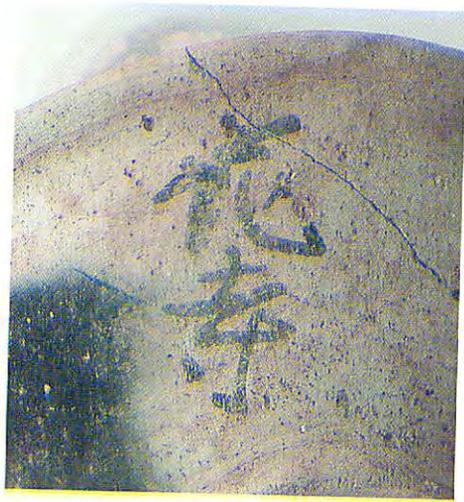


写真40 寺内出土遺物を視察する埼玉県知事 92. 4. 27

千代遺跡群

— 千代遺跡群発掘調査概報 — 1993

発行 平成5年11月15日
 編集・発行者 江南町教育委員会 TEL 0485(36)1521
 江南町千代遺跡群発掘調査会
 〒360-01 埼玉県大里郡江南町中央1丁目1番地
 印刷・製本 (株)太洋社印刷所
 埼玉県大里郡寄居町1069
 TEL 0485-81-0022



『花寺』 墨書